[サリュ]

フランス語で〈救い〉の意。

Salut

人が集まる。いのち弾ける。

シアトリカル

應典院

平成9年、スタート。

発刊のごあいさつ

文化のお寺應典院の再建は、なにわの名刹大蓮寺が創建440周年記念事業として着手するものです。大蓮寺は、多くの文人や教育家、また芸能家とも縁の深い、文教の寺院。應典院はその伝統を踏まえ、地域に開かれた、まったく新しい都市型寺院として平成9年に竣工します。

その構想は、劇場型の本堂を有し、あらゆる世代を対象としたさまざまな研修やイベントを開催、新しいこころのエネルギーを放つ、文化創造の拠点づくりといえます。もちろん劇場機能も装備し、演劇やアートなどの自主公演なども計画、まさに都市の異界として、多くの注目を集めることでしょう。

そして、すべての根本に流れる大乗仏教のみ教え――大慈悲＝救い、を、いまという時代に伝えるため、應典院は永劫に一心に精進を重ねる所存です。

本誌は、應典院の実現に向け、すでにスタートしている多くの教化・教育事業、またそれに加え同寺のプロデューサーとして活躍する秋田光彦住職の活動ぶりをお伝えするものです。当面、夏と冬の年2回の刊行を予定しておりますので、どうか末永いご愛読をお願い申し上げます。

應典院再建委員会代表　秋田　光茂

文化のお寺〈應典院〉のニューズレター

5

1996●SUMMER●VOL.5

発行■應典院再建委員会
編集■サリュ編集部

應典院　〒543 大阪市天王寺区下寺町1―1―30　TEL(06)771-7641　FAX(06)771-5943

應典院再建勧募のご協力ありがとうございました

その2／50音順・敬称略／ご家族は併記（平成8年7月27日現在）

平成七年夏より開始された宝珠銘記、聖柱銘記の勧募には、これまでにのべ七百三十五名の方にご協力をいただきました。厚くお礼申し上げます。前回に引き続き、以下にご寄進いただきましたご芳名を記します。

〈宝珠銘記並びに特志〉

井出　一文
伊東　義雄
伊東　しさ
稲田　高志
稲掛　伝平
犬塚　理子
乾　浩子
井上　和昌
今井　與蔵
今林　真哉
サト　憲市
岩瀬　利子
岩瀬　健紀
岩瀬トシ子　隆彦
上田　英輝
上田　美代子
上田　冨二子
上田　進
植田　洸士
内上　寛一
右近　良治
王　志博
王　志文
江浦　保
大塚　嘉隆
大西　浩平
大山　洋子
大山　貴弘
大山　真依
岡田　あおい
岡田　崇史
岡橋　泰一郎
岡本　典子
岡本　栄樹
岡本　正枝
奥田　申之輔
奥村　聡彦
小澤　慧真
小澤　一誠
織田　知明
小原　義広
音野　忠正
音野　智昭
音野　直子
音野　和子
越智　朋香
越智　慶
越智　佳余
門上　剛之
鍵岡　琢実
加藤　晶彦
加藤　武志
加藤　佳弘
加藤　砂織
加藤亜矢子　秀輔
加藤慎太郎　哲
加藤　礼子
加藤　友晴
加藤　徹
金井　靖行
兼貞　剰至
蒲田　幸三
川勝　智子
川勝　康次
川勝　清次
川西　勝
川西　誼登
川西　関
川西　典慶
木下　和男
北村　秀機
朽名　幸造
栗畑須美子　桃世
黒田　将史
倉橋　良雄
小林　正道
近藤　維良
近藤　愛子
近藤　正寿
近藤　千寿
近藤　和沙
近藤　宏紀
近藤　憲子
斎藤　道子
斎藤　仁孝
斎藤　良子
斎藤　泰三
斎藤　恵子
斎藤　寿彦
斎藤　律子
阪口　豊規
佐々木あずま
佐野　弘智
佐野　健二
塩川　佐野
四宮　芝野加奈子
四宮　義久
渋谷　正明
島田　耕一
島田　龍彦
下前　徹
新海　郁馬
新海　数馬
徐　悠紀
徐　葉子
徐　明子
神農　憲治
鈴木　啓司
鈴木　淳美
鈴木　守
鈴木　健夫
鈴木　貴人
須藤　末雄
関　至宏
世耕　弘大
高松　邦弘
高松みどり　ノ厳子
武田　勝也
武田　修一
辰野　貴一
辰野　幸雄
谷川　綾子
谷川甚之助　友紀
谷口　浩二
田中　里奈
田中　秀弥
田村　精造
竹延　友紀
近澤　新一郎
津下　里加
津下　紀子
和昭
辻　幸雄
辻　八重子
辻　歩
辻本　雅一
筒井　淳
土屋　博男
東松　至郎
豊原　功侍
豊原　由規
中尾　英子
中尾　優
中尾　起久子
中尾　昌世
中尾　有里
長崎　裕太郎
中島　幸子
中島　慶彦
中島　雅彦
中瀬　亜由美
中瀬　かおり
中瀬　よい
中村　勝也
中村　準一
中村　恵津子
塚田　智江子
杉山　愛子
長宗　成美
長宗　敬子
那須　大史
浪田　昌治
浪田ウノ子　厳
西岡　一三
西川　吉伯
西林　拓志
西林　孝紘
西村　彰朗
西村　正英
西野　亜紀
橋本　宗宏
橋本　法明
長谷雄　千代子
長谷雄　隆明
長谷雄　珠恵
長谷雄　智恵
長谷雄　隆元
長谷　雄香利
林　匿名
林田　好信
林田　和永
林田みどり
林田　茂
早田　敏二
半田　信一
久川　泰明
廣石　憲一
平井　直行
平井　杏奈
平井　安一
平野　悟
比良野　光彦
福永　光美
福本　遼介
藤川　浄
藤井　健之助
藤井ミキエ　祐子
藤井　昇
藤井　美
古堅　雅也
星野　茂丸
細川　史男
細川　泰江
細川　貴史
細川　真歩
堀野　隼平
堀野　航平
堀井公一朗
堀内　正夫
堀江　剛
本田　光徳
松田　政一
松本　裕史
松本　友久
松村　一貴
万城目　順子
三橋　仁士
南尾　尚央
南尾　哲哉
南尾　真理耶
宮川　潤一郎
宮川　諒子
宮川　幸子
宮田　邦彦
宮田　恵一
宮田　和典
山本　麻有
山本　正廣
矢追　宗次
矢追　市郎
矢追　友子
矢追　樹
八木　英子
八木　瞳
八木場　金吾
八木場　仁美
八木場真二　美
八木場　昂平
安田　智栄美
安田　健太
安田　叡弘
安田　光隆
安田　昭一
安田　保
山田　隆子
山田　佐美
山本　浩嗣
山本　裕介
山本　正一
山本　永子
山本　博子
山本　俊和
古家　陽子
湯川　芳美
湯川　華
湯川　卓史
湯川　順三
吉崎古登美　真久
吉田　潔
渡邉
阿部　靖子
天津　通夫
中瀬　雅彦
中村　準一
藤井美祢子
藤井　実
藤井　正雄
藤原　高秀
中原　実道
春道　実応

〈寺院篤志〉

〈篤志〉

福永　勝
匿名
吉田万寿美　氏

自由に語りあう。交歓しあう。仏教は、感性のコスモロジー。

應典院住職　秋田光彦師に聞く。

生と死の接点・寺町

お元気ですか。

應典院の工事が急ピッチで進捗しています。七月一杯には全体の鉄骨も組み上がり、その姿が俄然具体性を帯びて、現れつつあります。

北側から工事現場を見下ろすと、應典院を挟んで、西側に林立する高層ビル、東側には鬱蒼とした緑と墓地が、聖と俗の不思議なコントラストを醸しだしています。恐らく日本でも希少なこの異景は、應典院を先頭にしてずっと南の一心寺さんまで、約一・八キロに渡る下寺町全体を遠望しています。

環境教育の専門家である赤尾整志さんが、この一帯を指して曰く、「緑の寺町は、人間の意識系にあるコスモ・ランド」とか。

町づくりというと、いきいきアメニティ空間なんて言葉がもてはやされますが、寺町は少し違う。寺は間違いなく死を象徴していますし、緑や墓碑、土壁などは、普遍的なイメージとして、それを裏書きするものです。共生と共死が、ひとつに連なった意味を持つように、都市にもそういう陰影があった方がいい。全国にひとつくらい、死を連想させるような町づくりがあっても面白いのではないでしょうか。

春のお彼岸に、この寺町一帯で「なにわ人形芝居フェスティバル」を開催、二日間で二万人の来街者があり、お寺の本堂や境内は子どもや家族連れで賑わいました。

イベントとしての成功はもちろんですが、都市の中で「死」と「生」が寄り添いながら今を共有する時空を、ぼくたちは長い間忘れていたような気がします。生と死の接点にある寺町。それを介しているのが人形たちである、という点が、ぼくには格別に興味深いものでした。

教団に従わない「宗教」の様相

この四月、五月は、應典院プロジェクトのメンバーといっしょに、コンセプトブックを作る作業に専念してきました。「誰が読んでも分かる應典院」が趣旨でしたので、宗教色を抜き、文化装置としての意味を強調しました。

編集の過程で、メンバーとぼくの間に小さな衝突が何度かありました。

宗教施設として、その本義を表したいというぼくと、それを十分理解しつつ、けれど表現上は抑制すべきでは、というメンバーの意見の相違がありました。メンバーの総意を一言で表すと、「残念ながら、一般社会では、宗教は十分には信用されていない」という認識でした。

別段驚くことではありません。同じようなことが、最近の世論調査でも出ていますし、早い話、この国には、行政も企業もまともに宗教とはかかわりを持たない、という習性があります。民俗的には霊性ゆたかな日本人が、こと宗教団体・活動になると警戒心を剥き出しにするのは、おそらく近代の長い歴史の中で「日本人と宗教の関係」が歪められてしまったからでしょうか。最近頻繁に登場する、反社会的な宗教教団の存在も関係しているかもしれません。

その反面、いま多くの人々が宗教的な感性とか超越的な文化の重要性に気づきはじめています。オカルティックな文化を超えて、ヒーリング、あるいはトランスパーソナル（この5月に初めて学会ができました）といった、従来の宗教的システムに頼らない、癒しの探究も始まっています。信じる信じない、という二元論でなく、次の時代の宗教は、もっと多様な感性レベルで語られるのかは、という予感がします。



3月NGO大学修了、仲間とお別れの記念に。

現代人の求めるような癒しを、今日の宗教は引き受けることがむずかしくなってきたのではないか。旧い体制の中で、既成宗教が足踏みしている間に、皆が銘々に宗教を自分流に解釈し始めた——そんな感じがします。

普遍のコスモロジーへ

七月八日に行った應典院フォーラムには、企業や行政、市民団体からマスコミ、と多彩な顔ぶれが集まりました。

行政、企業、公益団体、市民団体等々、集まっていただいた方々の顔ぶれも多彩でしたが、みなさんの態度が「仏教」に対し開かれていた、というのも、ぼくにはうれしく感じられました。

「お寺はいわば昔からNGO（非政府組織）なんだから、もっと多くの人に仏教を伝えるべきだ。フリースペースならどこにでもあるが、ここがお寺であることの意味を発信してほしい」という参加者の発言に代表されるように、何千年前の教えである仏教に対し、いまを生きる人々が何かを感じ取ろうという誠実な姿勢が、そこにはあるように思いました。

むろん、誰も「葬式仏教」に期待はしていません。あるとすれば、世俗を覆う世界観とは別の価値観——何千年もの間、磨き込まれた普遍的な精神のコスモロジーが、今日の多くの課題を解決する糸口になるかもしれない、という期待なのかもしれません。

それは、ことさらに難解な仏教語を駆使することでもないし、世俗に媚びたような仏教ごっこを言うのでもない。権威や制度を超えたところに、もう一度、仏教の原点を立ち返らせる作業を、ぼくたちが試みる、ということです。

仏教は、お坊さんやお寺の専売特許ではありません。市民の誰が自由に仏教を語ってもいい。実践してもいい。例えるなら、そういう両者が互いを尊重しながら、いっしょに共同して、次の時代の宗教の姿を探し出していく。そういうかかわりあいが、ぼくはとてもたいせつだと思います。

一種のドグマである宗教を、どのように市民社会に融合させていくか。多様化とか共生といわれる現代に、宗教がどのように機能できるのか、議論すべきことは山ほどあります。應典院では、そういう対話を積極的に受け入れていきたい。同時にそれは、宗教者であるぼくの、アイデンティティを探る旅にも等しいものでしょう。

さて、應典院の工事は十月一杯でおおよその外装を終え、その外観が明らかになります。年内に内装工事、さらに外構工事と続き、本体は明年三月までに完成、四月二十七日の落慶を待つことになります。

プロジェクトも順調に進み、オープニングの企画や新しい会員公募事業などの計画も始まりました。ますます本格化する應典院のこれからについて、あたたかい応援をお願いします。

TALK&TALK

「場の力」と「癒しの文化」
應典院というソフトウェアの目指すもの
——應典院フォーラム見聞記

都市の暮らしの中に軒を伸ばしていくわけです。

それがどのような形となっていくのか、これは建築のような設計図があるわけではありませんので、まだ判りません。多くの人と関わり合うことが肝心です。應典院に訪れた人と人が、互いに心の交流を行っていくことで、常に書き足されていく柔らかい設計図、そういう風に進んでいくことになるでしょう。

ここにご報告する「應典院フォーラム」も、應典院のソフトウェアを描き出していくための、人と人との関わりの場でありました。どのような線が書き加えられていったのか、早速ご紹介していきましょう。

四人のゲストの共通点

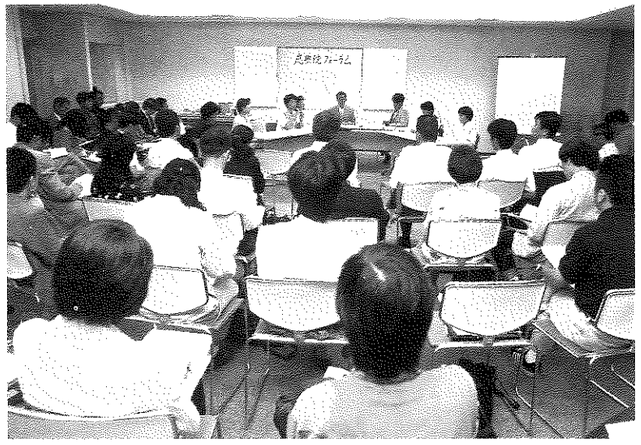
七月八日、梅雨の名残が少し傘を湿らせる中、天満橋ドーンセンターの会場に六十人を越える参加者を集め、應典院フォーラムが開催されました。一般企業、演劇関係、市民団体、行政関係の方々に混じり、放送や新聞社などマスコミの記者も多数参加されており、應典院への注目の高さが感じられます。

フォーラムの進行は、應典院プロジェクトのコアメンバーである TEAM Presence が担当しました。ふだん、このチームは秋田光彦さんを交えた五人で活動し、應典院を取り巻く人的ネットワークの事務局的な役割を果たしています。この日は、チームから西島宏さんと栗本智代さんが司会とコーディネーター役を引き受けて登壇されました。そして、チームのスーパーバイザー、京都精華大学人文学部助教授の橋爪紳也先生をホストに、四人のゲストのみなさん、そして参加されたみなさんと一緒に、都市における「癒しの文化」について語り合っていくというスタイルがとられました。

ゲストのみなさんは次のような顔ぶれでした。

大垣敬子さん。所属されている扇町ミュージアムスクエアは、全国的に知られた演劇のスペースですが、最近ではお芝居以外の企画でも注目されています。福岡県在住の服飾家による「死装束」の展覧会、現代美術家のフィーリングアーツ展覧会など、大垣さんの手がけられた企画は、二十代の若い女性から大きな反響を得ておられます。そこに「癒し」というテーマを感ぜざるを得ないのですが、大垣さんは、癒す癒されるという前に、表現すること、表現されたものに触れることを通じて、人と人が関わっていくことの大切を強調されていました。

金香百合さん。大阪YWCA幹事で、同専門学校の国際関係開発学科の専任講師でもあります。その講座では、ボランティア活動をしたいという気持ちをよりよい方向にまとめていく技術を教えておられるとのこと。受講者には、阪神大震災でボランティアに行ったけど、何もできなかったと悩んでいる方も多いそうです。ボランティア活動も、気持ちだけが空回りして燃え尽きてしまわないように、一種のトレーニングは必要でしょう。ただし、技術と言っても、金さんが教えておられるのはノウハウではありません。その人の中にある「よりよい人と人の関わり合い」という種を伸ばし、その人の人生哲学を打ち立てていくためのお手伝いをされているということでした。



中央にゲストが八の字型に並んで、フォーラムが開始。

堺潤子さん。大阪市民大学センターの企画スタッフで、京都かやぶき音楽堂コンサートツアーや、奥美濃国際サマーセミナーなど、市民学習活動を民間の視点から推進されておられます。大阪市民大学センターといえば、いつでも誰もが学ぶことを実現するために、もう二十年以上活動を続けている、生涯学習の代表的活動拠点。人はそれぞれ、汲み尽くせない学びの気持ちを持っています。ただ、現代の社会には、その気持ちを受け入れる場所が非常に限られている。堺さんのお話からは、その気持ちに応える学習の場を提供するに留まらず、そこに生まれる交流の場として、そして文化を創造していく場として、着実に活動されている様子が感じられました。

高崎邦子さんの勤めておられるJTBは、一般的なイメージは旅行会社ですが、高崎さんの所属する営業開発部では、交流文化としての旅行産業の可能性を研究されているとのこと。地域の創造、情報の創造、観光の創造、そして交流の創造という四つのキーワードを持ち、観光客を迎え入れる観光地側のコンセプトプランを手がけられたり、関西活性化の大規模プロジェクトに参加されるなど、その活動内容は多彩です。観光＝光を見るというイメージから、光を感じる感光へ、という言葉や、海外旅行という異文化との接触と日常的な地域コミュニティの関係などのお話に興味が湧きました。

一見、携わっているお仕事がばらばらのようであり、それでいて「癒しの文化」という点では共通しているようにも思われます。ゲストのみなさんが目指されていることそれぞれには、相通じる何かが隠されているのでしょうか。

橋爪先生の謎解き

その謎は橋爪先生によって明快に解き明かされていきました。

私たちが「癒し」と感じていること、または「癒された」と思うとき、それは決して一人の人間の中だけで行われることではありません。癒し、癒されるという関わり合いがあります。大垣さんがおっしゃっておられたように、大切なのは人と人の関係性にあるのでしょう。

その関係性はどのように築き上げられていくのでしょうか。大垣さんが言われた「表現すること」それはキーワードかも知れません。ただ、それは「作品を作る」ということに限られないでしょう。金さんの言われたその人なりの人生哲学も表現であり、堺さんの言われた汲み尽くせぬ知的欲求もまた、表現であるはずです。

要は、その関係性が開かれていること。聞くだけ、見るだけではなく、関わり合っていくことが大切です。

橋爪先生の謎解きは場所の問題にも及んでいきました。

堺さんや金さんの持たれている講座という学びの場所は、同時にそこで共に学ぶという関係性の深い場所でもあるわけです。このようなコミュニティが在って初めて、自分という「我」を越えた「関わり合い」


ゲストとスタッフと交流会で。
橋爪先生もいっしょに。

刊行なった「應典院コンセプトブック'96」

應典院
コンセプトブック '96
應典院プロジェクト

に気づくことができるのかも知れません。いわば、自分をもっと客観的にみること。それができるような場、そのような場を持っているか居ないかが問題になるのかも知れません。

では、コミュニティの外側では、癒し癒されるという関係性はあり得ないのでしょうか？　難しい問題ですが、ツアーコンダクターとして、世界各地に赴かれてきた高崎さんのご経験談は多くの示唆を与えてくれました。

海外旅行で異文化に触れること。これは、住んでいる社会から逃避することではなく、もっと自分を相対化する行為であり、そこにもコミュニティが生まれる土壌があるのです。例えば、ネパールツアーなどでは、過酷な自然条件の中を見知らぬ者同士で旅行していくうちに、強い連帯感が生まれてくるそうです。

寒い山小屋の中で、小さなおにぎりを分け合うという「関わり合い」に中にも、癒し癒される関係性がある。

このように考えていくと、生涯学習の場であれ、ボランティア活動であれ、展覧会であれ、旅行であれ、自分が生かし生かされているということに気づくことで、癒し癒されるという関係性が生まれてくると言えるのかも知れません。


フロアは60名の参加者で埋まった。

予測できない場

但し、このような「気づき」は、普段の生活ではなかなか浮かび上がってきません。

例えば、金さんや堺さんが携わっておられる「学び」の場は、そこに集うという時に、既に、深い関係性が発生しているわけです。ある意味で、集う目的意識がはっきりしている。これは素晴らしいことですが、都市で暮らす若者の多くは、目的さえ判っていないかも知れない。

また、大垣さんや高崎さんの携わっておられる場は、ある意味で関係性がフリーな場であり、「遊び」の場と言い換えることができるかも知れません。それ故に、作品であるとか、自然環境とか、強い表現物が求められるのかも知れません。

ゲストのみなさんは高い企画能力でそれぞれの「場の力」を強め、老若男女を問わない関係性の絆を作られているわけです。

応典院のソフトウェアプランを描き出して行くには、ゲストの方々のような企画力が欠かせません。その秘訣を探るべく、コーディネーターからの質問が続きました。

例えば、堺さんからは、それぞれの人生の段階に合わせて選べるようなプログラムを作り、長く積み上げていけるような活動というお話を頂けました。高崎さんからは、予測できないことに出会えるという期待感の重要さを教えて頂きました。

橋爪先生の分析を借りながらまとめると、こういうことになるのでしょうか。まず、応典院という場所は、広く都市に開かれていなくてはなりません。例えば、目的意識もなく漂う若者にも。そのためには、応典院という場所は予測できないものに出会えるという期待感が必要でしょう。いわば、「遊び」。

また、開かれた心をしばませないためにも、常に人と人との関係性が開かれている場所であることも大切です。例えば、ボランティア活動のワークショップのように、そこに行けば必ず人と人との関わり合いが在るという、開かれた場所。そこに「気づき」がある。

そして、それぞれの段階に合わせた「学び」により我を越えた関わり合いが得られ、深い連帯感も生まれていく。

これは順を追って体験していくのではなく、それぞれが在るということです。

もしかしたら、応典院のソフトウェアの基礎である「気づき」「学び」「遊び」は全て同じ「人と人との開かれた関係性」ということを言い換えているだけなのかも知れません。もしくは、強い力を持つ「場」が備えているキーワードなのかも知れません。

温かい広がり

フォーラムは、参加されたみなさんからの活発な発言を得ながら、予定の時間を越えて続いていきました。紙面の関係上、ここに発言の逐一をご紹介できないのは残念ですが、貴重なアイデアを多数頂くことが出来ました。荒っぽくまとめさせて頂けるならば、そこには二つのテーマがあったように思われます。

一つは、多様性と申しますか、人それぞれに個性があるのだから、応典院は広い切り口を持ち、それぞれに予測のできない面白さを提供して欲しいというもの。

もう一つは、応典院はお寺であり、生と死を緩く結ぶ場所であること への期待。旺盛な緑をかざす生玉の森の木々が、根っこでお墓とつながっているような、応典院ならではの「場の力」を伸ばしていって欲しいという期待。

それぞれに大切なことだと思います。「気づき」「学び」「遊び」という多様な切り口はもちろんのこと、ソフトウェアの四つ目の基礎である「宗教」があってこそ、応典院という場の意味が生じます。

この四つは、一直線に並んでいるものではありません。それぞれが、在る。その点を結んでいくと、『応典院コンセプトブック』に描かれていたような正四面体となるはずです。

正に、この形こそ、応典院が基礎とすべき人と場の関係性ではないだろうかと、改めて感じ入りました。

多くの線が描かれました。それは同時に、応典院という場所を通じた人と人との関係性が広がっていく様をも示しておりました。

三時間を越えるフォーラムの中で、温かく広がっていくつながり。建築同様、ソフトウェアの方も、少しずつ、軒を伸ばしていったように感じられました。

（取材／文　吉崎　中）

連載・宗教乞食のモノローグ（5）　中谷　加代

友情物語

高校二年の秋のことだった。私たちは、晴れの運動場で翌日の運動会の練習をしていた。彼女はとても楽しそうに、私とダンスを踊っていた。手をつなぎ、挨拶をし、肩を組んでステップする。その底抜けの明るい笑顔が、今でも私の目に浮かぶ。そのほがらかな笑い声が耳に残っている。手を取り踊りながら、私は「私たちは友だちなんだ！」とうれしく思っていた。

今思えば、それは彼女があまりに明るく、楽しそうだった故なのだ。だから私は彼女の笑顔が「私はこんなにあなたが好きなのよ」と言っているように思ってしまったのに違いない。

翌日の運動会でも、彼女は明るく楽しそうで、私も彼女といっしょに楽しく幸せだった。運動会の次の日は代休だった。翌々日登校すると、何と！　私たちは彼女が亡くなったことを知らされたのだった。先生から詳しいことは何も聞くことはできなかったけれど、「列車に飛び込んで自ら命を絶ってしまった」という事実は、あっという間に生徒間を駆け回った。

私は、まったく事態がのみ込めず、信じられない思いで「なぜ？なぜ？」と自分に問いつづけることしかできなかった。お葬式の日、日頃人前では用いない眼鏡をかけて、私の疑問にちょっとでも答えをくれないものかと祭壇の遺影を見つめ続けた。彼女が私に残していったのは、悲しみでも寂しさでもなかった。

「あんなに明るく楽しそうだった人が、なぜ翌日に自ら命を絶ったのか？」「なぜ死ぬと決意した人が、あんなにも明るく楽しくしていられたのか」「死ぬって何なんだろう」などの疑問を残されて、答えを求め続けた。

後にカウンセリングを学習する中で、「列車に飛び込むというのは、強い覚悟のある人が採用する方法」だと聞いた時、私は心の中で「なぜ？」がまた大きく膨らんだ。彼女は決して衝動的に命を絶ったのではなく、覚悟の上のことだった。なのに私は何も気づかずにいたのだった。私はそれでも、彼女の友人だと思っていた。自分が情けなく、恥ずかしかった。

それから、また何年も経て、カウンセリングという仕事上でリスト・カットの経験のあるAさんとの出会いがあった。

Aさんは、「高校生の頃、私、死にたい病にかかったのよね。毎日毎日、自分はなぜこんなにダメ人間なのか、と自分を責めていてね、フッと死んでしまおうと思ったのよ。そしたらね、今まで苦しんで自分を責めてたのが嘘みたいに世の中ひっくり返るのよ。死んでしまえば、苦しまなくてもいいって思うと、まるで逆になるのよ」

Aさんの言葉を聞いて、長年の疑問はやっと答えを見つけ出せた。

カドリールを踊りながら、彼女はもう苦しんでいなかった。それどころか、まさに命をかけて生を楽しんでいた。彼女がその決意を得るまで、どれほど長い間、深い苦しみの中にいたことであったろうか。友だちがいのない、気楽トンボの私は、彼女の深い苦しみの末の明るさの中で、「友情」の温かさとやさしさを与えていただいていたのだった。

断腸に堪えない、友情物語である。

（なかたにかよ／カウンセラー）



本堂が、昔懐かしの紙芝居劇場に早変わり。

人形芝居が奏でた「極楽世界」

1996.3.24 ～25　なにわ人形芝居フェスティバル、下寺町一帯で開催

日本の古典芸能、人形浄瑠璃は、もともと仏教劇がルーツといってもいい。阿弥陀仏さんや菩薩さんが現れては、霊験を振りまき、ご加護に導かれて大団円、なんて話が多い。昔の人は、人形劇を通して仏の教えを学んだのだ。

人形は、もとから子どもの愛玩具として愛用されたわけではない。人ではないが人の形をとり、それを形依に人以上のことを語る。人形は我々の霊性を物語るシンボルといえるかもしれない。

寺町は暗い町か？

去る３月23・24の両日、わが下寺町界隈で「なにわ人形芝居フェスティバル・冥途インてらまち」が開催、２日間でナント２万人の参加を得て、大盛会となった。北の大蓮寺から南の一心寺まで、約２キロの道のりに一直線に並んだ26のお寺と２つの神社。春彼岸の好日和の下、寺町の表参道は、子どもや家族連れで埋め尽くされた。

寺や神社はかつて縁日に出店が並んだり、子どもの遊び場になったりと、地域の中心だった。下寺町も戦前までは大勢の参詣客で賑わったが、戦災で檀家が郊外へ移り、周りはどんどん商業化が進んで、高層ビルが林立する。

寺と地域の結びつきはほとんどなくなり、人が寄るといえば葬式や法事の時だけ。寺町は暗い町になってしまった。

僧侶はあの世の営業マン

この人形フェスの企画を組み立てたのは、一心寺シアターの秋山シュン太郎さん。劇作家である秋山さんが、長野・飯田市で出会った人形劇フェスティバルが発想の原点だった。

これがふくらんで、95年秋に一心寺の高口恭行師が寺町活性化案として発案、それに大蓮寺・應典院をはじめ並びの寺院（大半が浄土宗寺院）が賛同するかたちで実現した。

「昨年は、阪神大震災、オウム事件と、この世の地獄を見た。我々僧侶は極楽世界の営業マン。世の中にもっと極楽をＰＲしなくてはならない」（高口師）

各寺院では、早速受入れのための実行委員会を結成、不肖私が事務局長になって、寺院間の調整役に走り回った。

生と死が溶け合う町

かくして初の寺町イベントの開幕。

人形劇は、大蓮寺・源聖寺・心光寺・大光寺・西念寺・一心寺の６ケ寺で上演、さらに拝観寺院から休憩所になったお寺まであって、町を挙げて全面開放となった。参加劇団43、ボランティアの高校生が80人、フリーマーケットのお母さん方の団体が15等々…山門に掲揚された、五色の仏旗が、寺町の存在をしっかりとアピールした。

とりわけ好評だったのは、寺町スタプラリー。各寺に設けられたスタンプを集めると、記念品が貰える式の「現代霊場巡り」。ご朱印帳よろしく、人形劇そっちのけで寺々を走り回る子どもたちの姿がまぶしかった。また、大蓮寺と一心寺に設けられたフリーマーケットでは、母親たちにまじって、障害を持つ人たちの作業所の出店もあり、いろんな交流を見ることができた。あ、ここはお寺なんだな、と実感できるシーンだったように思う。

春彼岸は、草木も冬の眠りから覚める時。寺町を巡る人々も、本尊に手を合わせる人、境内の花を愛でる人と、さまざま。一様にニコニコと柔和な笑顔が印的だった。

寺町と人形。要約すれば、この世の果ての巡り合い。ここに子どもや家族が分け入って、何の違和感もなく生と死が溶け合っていく。97年春には應典院も仲間入りして、このイベント、ますます寺町を面白くしてくれそうだ。

（あきた・みつひこ）



お寺の本堂が、明るく見えた。

ふたりのタイの開発僧を囲んで
ＮＧＯ広場で仏教と開発を語り合う



去る５月12日、大蓮寺にタイの開発僧パイサーン・ウィサーロ師とユキ・ナラテウォー師が投宿、秋田光彦さんらの呼びかけにより、ＮＧＯ広場を開催しました。おふたりは、在日のタイ人のために、２カ月間に渡る全国頭陀行脚の途上、この日も日本橋のタイ料理店で行われた「タンブン（布施）の集い」に参加、集まった50人ほどのタイ人と仏教による交流がありました。

夜６時から大蓮寺本堂を会場に、ＮＧＯ広場を開催、関西のＮＧＯ関係者やジャーナリスト、研究者、学生ら35名が参加しました。前半は、パイサーン師からタイ社会の抱える問題とそれに対する師の考え方について述べられ、後半はユキ師（じつはタイ留学中に得度した日本人僧）による瞑想のワークショップがありました。参加者からの質問も相次いで、ひとつひとつていねいに回答する両師の誠実さが印象的でした。

文教の寺院・大蓮寺がルーツ
名門・天王寺高校記念碑が建立

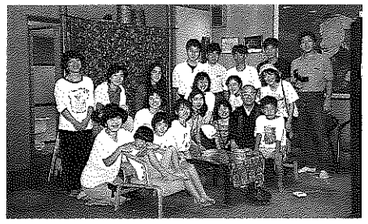


文教の大蓮寺は、教育のお寺としても有名ですが、このたび天王寺高校が百周年記念事業として、記念碑を境内に建立、その建碑式が去る４月24日、盛大に執り行われました。

天王寺高校は、明治29年、旧制・天王寺中学校として当山境内にて開校、その栄えある百年の校史の第一頁を記しました。

当日は、小川修一校長をはじめ教職員、同窓会、在校生など70名が参加、秋田光茂住職導師のもと仏式による除幕式が行われました。挨拶に立った秋田住職からは「天高を生んだその伝統を引き継ぎ、戦後パドマ幼稚園を開園、また明年には仏教文化及び教化拠点として應典院を再建するなど、地域教育のため貢献していきたい」と決意が述べられ、大きな拍手を受けました。

若者１５人が、夜を徹して語り合う
秋田さんを囲んでＮＧＯトーク



去る７月６・７の両日、ＮＧＯ大学の若い面々による「寺町を歩こう」が開催、６日夜は勉強会を兼ねて、秋田光彦さんを囲み、トークの花が咲きました。

若い社会人や学生を対象としているＮＧＯ大学は、気づきや開発を学ぶ市民講座として10年の歴史を持ちますが、その同窓メンバーが大蓮寺を訪れ、秋田さんと宗教談義を交わそうと企画されたもの。寺町の歴史からオウムまで幅広い話題に盛り上がりました。参加15名。

都市寺院をどう開くか
超宗派のフォーラムに150人参加

閉鎖的とされる都市寺院の現状から「都市寺院をどう開くか」のテーマのもと、教化情報センター21の会と浄土宗東京教区青年会が共催によるフォーラムが、去る３月25日、東京・芝の増上寺で開催されました。

このフォーラム、21の会の事務局長を務める秋田光彦さんが中心となって、東西の青年僧が交流しながら、昨年夏より準備を重ねてきたもの。新宗教研究の第一人者である国学院大学井上順孝教授をはじめ武田道生浄土宗総合研究所研究員や梶田真章法然院貫主、校條諭文化科学研究所主任研究員、枡野俊明ブリティッシュコロンビア大学教授ら多士済々のゲストを迎え、実のあるトークが展開されました。

メインゲストの井上教授は、「既成仏教の諸問題の根底には、長老支配という構図があり、それが社会感覚とのズレを生んでいる」と指摘、「開く宗教とは、何よりも宗教者の頭を開くことが先決」と厳しいコメントも。また、スライド・音楽を駆使しながらのビジュアルレポートなど、秋田さんの手腕の冴える異色のフォーラムとなりました。

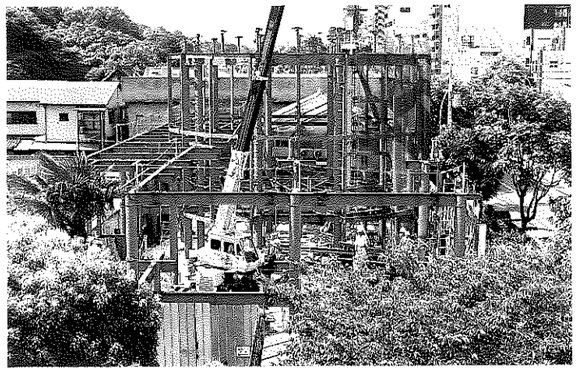
会場には、各宗派の青年僧を中心に新・旧の教団から約150名が参加、熱心に聴講していました。



ウォッチング應典院

異界のシンボル、全貌を現す

～應典院建築レポート



取材／編集部

去る三月五日に應典院の地鎮式を盛大に執り行い、以後順調に工事が進捗、七月中には鉄骨も組上がり、いよいよ應典院の空間が明らかになってきました。

工事のこれまでの経過を、造家建築研究所の河裾紳一さんにお聞きするとともに、高口恭行氏からは改めてその設計思想について語っていただきました。

地球と應典院をつなぐ

秋田「三月から始まった基礎工事が終わりました。工事にかかっていちばん最初に、壁に指示板みたいなものを貼りましたよね。あれはどういう意味なんですか」

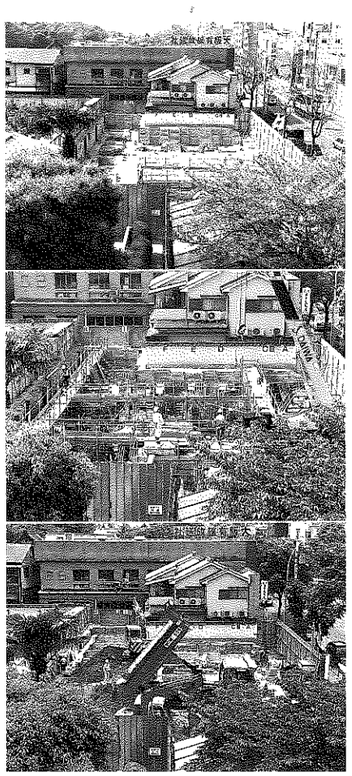
河裾「墨出しといって、最初に建物を真上から見た外形通りに縄を張っていくんですね（写真A）。縦横のグリッドを決めていくというか。その目安を指示板で確認していくわけです」

秋田「土台の前には杭打ちがありました」

河裾「杭は、いうならば地球と建物をつなぎとめる心棒みたいなもので、地中に深く差し込んで土台が動かないように支えるものなんですね。應典院の場合は、長さ十六メートル、直径四十五センチの杭を全部で三十七本打ち込んでいます」

秋田「その上にでかい基礎がのっかるわけだ」

河裾「そう。杭があって、基礎がもつわけだし、建物ものるんです。縁の下のそのまた下の力持ちって奴ですね」



秋田「四月に入るとずっと地下を掘り下げて、鉄筋をあばら骨みたいに組んでいきましたよね（写真B）」

河裾「この間の阪神大震災でも問題になりましたが、基礎部分の鉄筋を少なめに配筋したりすると、建物が倒壊しちゃうってことがあるんです。だからすごく基礎はだいじ。鉄筋を張りめぐらし、その周りに基礎の型をつくってコンクリートの打設作業に入ります。コンクリートはミキサー車で運んできて、現場ではホースを伝って、型の中に流し込む。だいたい一週間くらいで固まった部分の枠型を取り外して、基礎が完成します（写真C）」

鉄骨で空間をつかむ

秋田「基礎が完成していよいよ鉄骨になるわけですが…」

河裾「下寺町一帯は、大阪市の都市計画法によって、建築はすべて鉄骨造もしくは木造と決められています。今回の鉄骨は門真の工場で生産したものを、七月頭に現場に持ち込んで、そこで組み立てていったわけです。使用する鉄骨は、全部で約五百五十ピース。鉄骨自体すごく巨大なものですし、現場は狭い所ですので一気に運び込む、ということもできない。高さ二十メートルのレッカー車で吊り上げながら、回し込むという難工事でした」

秋田「應典院の本堂は円形ですが、やはり四角と違って、工事も難しいんでしょうね」

河裾「円形は当然直角で交わらないわけで、いろんな方向から力がかかるわけですね。配筋の要領なんか全然難しい。図面上の計算では成立しても現場では同じようにはいかないんです。そこが、建築の面白さともいえるのですが」

秋田「でも、こうして見ると、初めて應典院の輪郭が分かった、という感じですね」

河裾「空間量が見えますから、俄然具体的になってきますよね」

秋田「今後の進行について、教えてください」

河裾「棟上げが終わったら、次はコンクリートの躯体工事に入ります。床と壁、天井などすべてコンクリの打ち放しになります。最後に本堂の外壁になりますが、應典院の本堂はＧＲＣといって、コンクリのパネルを貼り付ける工法になります。外壁全部で二十角形の面に約四十枚のパネルをはめ込んでいくわけです」

秋田「なるほど。それができると、大体の様子が見えますね」

河裾「工事が順調にいけば、十月終わりには大体の姿はできあがってきます。あと内装と外構の工事です」

秋田「まだまだたいへんですね」

河裾「ええ。でも現場は順調に進んでいますので、大きな遅れもないと思います。新年からは家具類も入りはじめて、だいたい三月までには全体ができあがっていきます」

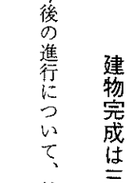
秋田「今から楽しみです。どうか無事故でがんばってください」

河裾「ありがとうございます」

建物完成は三月までに

建築家・高口恭行師

應典院の建築思想を語る



関西新空港が開港して、文字通り大阪の国際化も拍車がかかっています。二〇〇八年のオリンピック誘致の話も本格化している。

それに伴い、大阪の文化環境も整備されてきました。ＯＢＰ、天保山のウォーターフロントなどが注目されていますが、どれも新しいものばかりですね。機能的に作られたものではあるが、空間的な密度という点では魅力に乏しい。

個性ある場所で、いかに開くか

應典院の立地する下寺町は、三百五十年ほど前に造成された、伝統ある寺町です。二キロほどの距離の中に、三十近い寺社が甍を並べている。そして都心には稀な緑に包まれ、寺々の土塀が都市のなかの結界を形成している。町全体が風致公園地区に指定され、いわば歴史的な保護区として、昔の表情を残している。古くからの大阪の個性を雄弁に語る場所といっていいでしょう。

應典院の場所性とは、應典院が選んでそこに出来たのではない、周辺の風景というものと非常に深く結びついているわけですね。この既存の風景とどうかかわりあうか、ということが、應典院設計のひとつの課題になる。

それと、かつての寺町は参詣や巡礼、勧進や出開帳など、人間と情報の集積する場所であり、「開かれた場所」であった。いわば風景と情報が、寺町の密度のある空間を描いてきたわけです。

では、現代において「開かれたお寺」とはいかなるものか。それを姿かたちとして、どのように実現するのか、それがもうひとつの應典院設計の課題でした。

これには長い間のプロセスを経て、現在の姿となったわけですが、そこにも寺町の連なりに位置する應典院の位置づけが不可欠だと思う。いわば寺町の情報的な側面、賑わいや回遊という視点からも、期待されるものは大きいと思います。

闇の中の光明

仏教では、光を非常に尊重します。現世が闇だとすれば、宗教はそこに差し込む一条の光、という構図がある。かつて明かりに乏しい時代には、闇がこの世を支配し、そこに見える金色の仏は救いの光明であったわけです。

しかし、いまはそれが逆転してしまって、闇を探すこと自体が困難になってしまった。本堂もまた、明るくなりすぎて、参詣者のいる外陣がいちばん明るくて、本尊のある内陣がいちばん暗いという状態になってしまいました。これは宗教建築の本質が、希薄になってしまったということですね。

應典院の場合、幸いにも当初から演劇空間という条件がありました。演劇は、光と影の芸術でもあるわけですから、本堂としての闇を十分確保し、そこに光の存在を置いた。西から差し込む太陽光のなかに、本尊を安置した。我々は闇の中で、光明を見ることになるわけです。

聖と対話する場所

宗教の主題は、まず自己との対話です。それには、我々は、大いなる自然や歴史とともに生きている、という認識がたいせつだと思う。さきほど述べた風景や光明という点も、またその認識を深めるためのファクターといえるでしょう。

應典院の西側には、千坪の墓地が広がり、その背後には生玉神社の石垣とゆたかな緑が茂っている。應典院のロビーにあって、恐らくは数百年変わることのなかった、その風景と向き合うわけです。

この場所において、我々は何を思索し、発想するのか、またそこには風景と同様に人の交わりも重要になってくる。社会的に、あるいは文化的に精神的に、その交わりをどう演出していくか

これは建物以上に、じつに重要な試みであると思う。應典院のこれからの展開に大きな期待を感じつつ、興味深く見つめていきたいですね。（談）

（應典院コンセプトブックより抜粋）